

アカデミック・アントレプレナーの アイデンティティ・ワークに関する系統的文献レビュー

森 口 文 博

要 旨

本稿では、アカデミック・アントレプレナーが行うアイデンティティ・ワークについて、既存研究の体系的な文献レビューを実施する。抽出された 23 件の査読付き論文を分析した結果を整理し、残された課題と今後の研究アプローチを提案する。

キーワード：アカデミック・アントレプレナー、アイデンティティ・ワーク、システムティック・レビュー

1 はじめに

昨今、スタートアップ企業に対する期待が高まってきている。日本政府は 2022 年を「スタートアップ創出元年」として、スタートアップへの投資を重点投資分野の一つであると位置づけている（日本経済団体連合会, 2023）。中でも、高度な新技術が求められるディープテックと称される分野は、かつて日本の自動車や家電が世界に普及した歴史もあり、勝ち筋として期待が高まっている。ディープテックとは、特定の自然科学分野での研究を通じて得られた科学的な発見に基づく技術のことであり、事業化・社会実装を実現できれば、社会に大きなインパクトを与えられる。このような背景から、ディープテックの供給源として、大学で創出する研究シーズを活用して設立される大学発ベンチャーへの期待も高まってきている。

学術研究者が関与する研究シーズを商業化する活動は、アカデミック・アントレプレナーシップと呼ばれ（e.g. Abreu & Grinevich, 2013 ; Bercovitz & Feldman, 2008）、技術移転機関（TTO¹⁾）や大学発ベンチャーがその役割を担ってきた。日本では米国に倣い、大学の研究成果を技術移転するための施策が 2000 年の前後に打たれてきた（原ほか, 2024）。以降、大学発ベンチャーの設立件数は漸増しており、2023 年度の経済産業省の調査によると、過去最高の 4,288 社となっている（経済産業省, 2024）。

こうした大学発ベンチャーに対する期待は高まる一方で、大学発ベンチャーには通常のベンチャー企業にはない難しさも存在する。大学発ベンチャーは、(1) 実用化していない技術からスタートすること、(2) 事業計画やヒト・モノ・カネの経営資源が十分でないことから、「－（マイナス）2 スター

1) TTO : Technology Transfer Office の略称。日本では TLO (Technology Licensing Organization) というフレーズで定着している。

ジ企業」と呼ばれている (Shane, 2004)。さらに、大学の研究者が研究シーズを商業化する際に生じる利益相反マネジメントの重要性が指摘されている。利益相反に関する問題は、産学連携による経済価値創出への期待が高まる中で、大学から産業界への技術移転の推進や兼業の規制緩和等が進められたことにより、顕在化してきた問題である (新谷, 2016)²⁾。大学が取り組む産学連携の中でも、特に大学発ベンチャーと大学が産学連携を行う場合、研究者個人が産学連携の相手方である大学発ベンチャー側にも属することになるため、利益相反に関する判断に難しさが生じる (森口ほか, 2020)。すなわち、研究者個人は、大学に所属する研究者としての立場と大学発ベンチャーの運営者としての2つの立場があり、そのバランスが求められるため、大学発ベンチャーの事業に100%注力できない状況が生じる (森口ほか, 2020)。

このように、アカデミック・アントレプレナーシップに取り組む研究者は、2つの異なる立場による利益相反の状況から、自らのアイデンティティにおいても相反が生じていることも指摘されている。アカデミック・アントレプレナーは、研究者と起業家といった複数のアイデンティティをうまく統合し、コントロールすることが求められる。アカデミック・アントレプレナーがどのように自らのアイデンティティを捉え、調整しているのかを理解することは、アカデミック・アントレプレナーシップを理解するうえで、重要な論点の一つであると言える。

本稿では、アカデミック・アントレプレナーが自身のアイデンティティをどのように捉え、行動しているのか、すなわち「アカデミック・アントレプレナーのアイデンティティ・ワーク」について文献レビューを実施する。文献レビューの具体的な方法として、本稿ではシステマティック・レビュー (系統的レビュー) によるアプローチを採用した。本稿の目的は、このシステマティック・レビューの手法により、アカデミック・アントレプレナーのアイデンティティ・ワークに関する文献を体系的に整理し、先行研究の残された課題と今後の展望を提示することである。

本稿の構成は以下のとおりである。第2章においてシステマティック・レビューによる研究方法を説明し、本稿の具体的な文献の抽出プロセスを示す。第3章では抽出された文献をいくつかの基準で分類し、記述的な分析をする。また、抽出された文献の内容についてレビューする。第4章では、第3章で示した結果の考察と今後の研究の方向性を示し、第5章で本稿全体の総括と本稿の限界について説明する。

2) 新谷 (2016) は、産学連携に焦点を当てた利益相反の定義について「教員の個人的利益と大学における職務上の責任との間又は大学の利益と大学自体の社会的責任との間に衝突が生じている又は生じているように見える状況である」と述べている。こうした利益相反に関するリスクマネジメントを大学経営上の重要な要素と位置づけて積極的に取り組むことが求められてきた。

2 研究方法

2.1 研究方法

本稿では、文献調査方法としてシステマティック・レビューを採用した。システマティック・レビューは、文献データベースを用いたキーワード検索により、研究課題に関する文献を網羅的に抽出し、その特徴を分析・統合する手法である。対象文献を主観的に選択し、分析対象に対する質的な理解を目的とした伝統的なナラティブ・レビューとは異なり、システマティック・レビューでは、データベースの検索結果をもとに客観的に文献を選択し、分析対象を量的に理解することを目的としている（表1参照）。システマティック・レビューでは、文献の検索・抽出プロセスを再現可能な形で示すことで、文献選択のバイアスを最小化し、コンテキストを抜きに抽出された文献を俯瞰できることが特徴である。

表1 文献調査方法の違い

	ナラティブ・レビュー	システマティック・レビュー
目的	分析対象に対する質的な理解	分析対象に対する量的な理解
対象文献	分析対象となる文献をもとに主観的に選択	データベースの検索結果をもとに客観的に選択

出所：筆者作成

2.2 文献抽出のプロセス

レビューにあたっては、Tranfield et al. (2003) がまとめたシステマティック・レビューの基本的な手順に従った。本稿の研究対象はアカデミック・アントレプレナーのアイデンティティ・ワークに関する文献である。この研究対象に関する文献を客観的に特定するために、データベースとしてWeb of Science および EBSCO host を活用した。キーワードは「academic entrepreneur OR academic spin off」AND 「identity」である。なお、「academic entrepreneur」に関しては類似語である「academic spin off」も or 検索として含有する形での検索条件とした。さらには、文献分析の対象を社会科学の領域に絞るために、分野の抽出条件を「Business or Management or Economics or Sociology or Social Sciences Interdisciplinary or Education Educational Research or Business Finance」と抽出する分野を限定し、これらのキーワードがタイトル、アブストラクト、キーワードに含まれる文献を抽出した。また、出版時期は限定せずに検索した。文献の検索日は2024年3月28日である。

対象文献の特定プロセスは図1のとおりである。Web of Science および EBSCO host での検索結果から、重複する文献を取り除いた結果、49件の文献が抽出された³⁾。この49件のアブストラクトを

3) 本稿が対象とするレビューは「アカデミック・アントレプレナー」の「アイデンティティ」に限定した文献サーチ

確認し, identity のみをテーマとする文献 21 件, academic entrepreneur のみをテーマとする文献 2 件, どちらのキーワードにも関連しない文献 2 件, 2つのキーワードを含む文献のうちプロシーディングス論文 1 件を分析対象から除外し, 最終的に 23 件の文献について分析を行った。

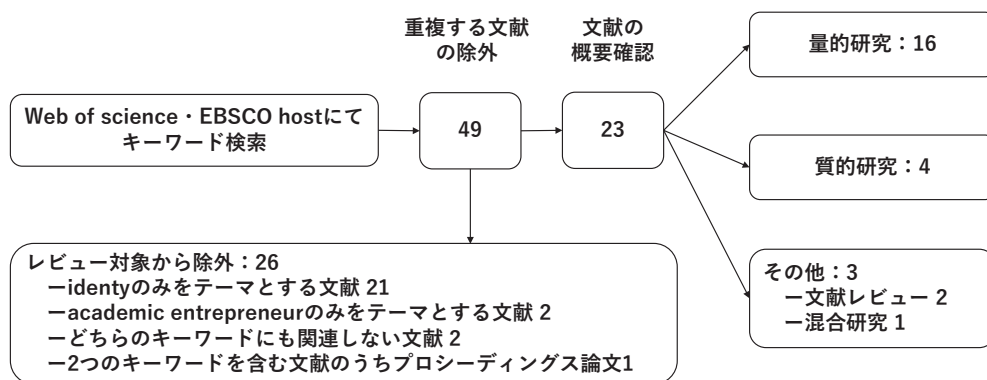


図1 対象文献の特定プロセス

出所：筆者作成

3 研究方法

3.1 記述的特徴

第1節では, 出版時期, 対象データの地理的分布, ジャーナル, 研究方法, 依拠する理論など, 対象となった文献の特徴を概観する。

3.1.1 出版時期

詳細は, 図2のとおりである。2006年が初出で, その後は1年にあっても1件で2018年までは推移している。2019年以降は, 徐々に得られる文献数が増加していることが分かる。また, 2006～2021年までの16年間で12件だったのに対し, 2022～2023年までの2年で11件と短期間で文献が数多く公開されていることが分かる。

を行ったため, ヒットした文献数が少なかったものと考えられる。なお, 本文に記載の条件にて「アカデミック・アントレプレナー」のみで検索したところ 289 件, 「アイデンティティ」のみで検索したところ 55,728 件の文献がヒットした。検索日は 2024 年 7 月 27 日である。

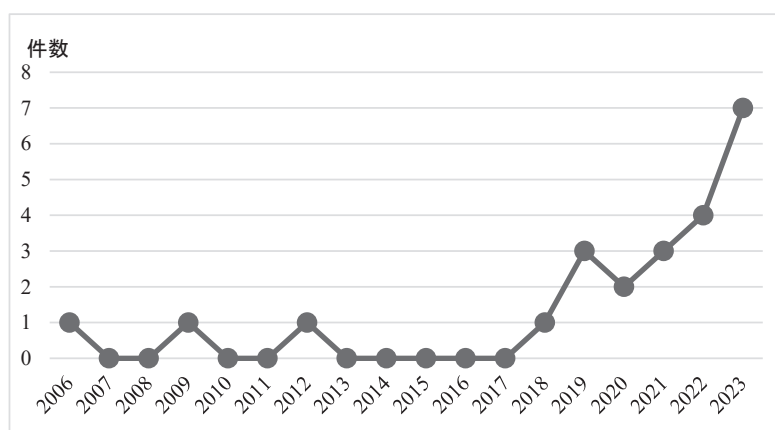


図2 academic entrepreneur の Identity を取り扱う文献の推移
出所：筆者作成

3.1.2 対象データの地理的分布

表3は、各文献の取り扱うデータがどの国のアカデミック・アントレプレナーを対象にしたものであるかを示したものである。対象とした23件の文献のうち、研究方法として文献分析を採用した2件を除く定量分析、質的分析、混合研究を採用した21件の文献が対象とした国の内訳を示している。中国、米国、欧州諸国のデータを用いた文献がこれまで主に採用されてきたことが分かる。

表3 データの地理的分布

	2006～2021年	2022～2023年	合計
China	4	3	7
USA	2	3	5
Europe	4	2	6
Italy	2	0	2
France	2	0	2
Finland	0	1	1
Switzerland	0	1	1
mixed	0	1	1
Pakistan	0	1	1
India	1	0	1
合計	11	10	21

出所：筆者作成

3.1.3 ジャーナル

文献の掲載されているジャーナルは、大きく2つに分類された。詳細は表4のとおりである。文献数が最も多かったのはアントレプレナーシップやスモールビジネスに関するジャーナルである。掲載数が多い順に International Entrepreneurship and Management Journal (3件)、Small Business

Economics（2件）の2誌に掲載された文献の他、1件ずつ掲載されたジャーナルが6件あり、合計で11件となっている。次に技術のマネジメントや技術移転に関連するジャーナルである。こちらは、Journal of Technology Transfer（2件）、Research Policy（2件）の他、1件ずつ掲載されたジャーナルが2件あり、合計で6件となっている。この2つの分類で全体の73.9%を構成しており、本稿がディープテックを活用したベンチャー企業を対象としていることを考慮すると、容易に想像できる結果である。その他の分野としては、社会科学、マネジメント、心理学系のジャーナルが含まれていた。

表4 掲載されたジャーナルの件数内訳

分野	ジャーナル名	2006～2021年	2022～2023年	合計
Entrepreneurship Small Business (11)	International Entrepreneurship and Management Journal	3	0	3
	Small Business Economics	0	2	2
	Entrepreneurship and Regional Development	0	1	1
	Entrepreneurial Business and Economics Review	0	1	1
	International Journal of Entrepreneurship and Innovation	0	1	1
	International Journal of Entrepreneurial Behavior & Research	1	0	1
	International Journal of Gender and Entrepreneurship	1	0	1
	Journal of Small Business and Enterprise Development	1	0	1
Technorgy (6)	Journal of Technology Transfer	0	2	2
	Research Policy	1	1	2
	R & D Management	1	0	1
	Technovation	0	1	1
Others (6)	Academy of Management Perspectives	1	0	1
	Actes de la Recherche en Sciences Sociales	1	0	1
	Journal of Applied Psychology	0	1	1
	Journal of The Knowledge Economy	0	1	1
	Review of Managerial Science	1	0	1
	Science and Public Policy	1	0	1
合計		12	11	23

出所：筆者作成

3.1.4 研究方法

表5は採用した研究手法により分類した文献数を示したものである。全文献のうち16件(69.57%)が量的方法を採用しているのに対し、質的方法は4件(17.39%)、文献分析が2件(8.70%)、混合研究は1件(4.35%)であった。この結果を踏まえて、2006～2021年と2022年～2023年を比較すると、質的研究と量的研究間の件数のギャップはあまり変化していないようである。Rothaermel et al. (2007)によると、アントレプレナーシップ研究の初期段階では、定量的な分析を行うための信頼できるデータや理論、フレームワークが不足するため、質的研究が特定の現象を記述し、影響を及ぼす要因を探るのにより効果的な手段であるとされている。研究方法の件数の推移に変化が見られないことから、アカデミックアントレプレナーのアイデンティティに関する研究において重要となる変数が、質的研究によりある程度見通せている可能性もあれば、何らかの理由により質的研究が不足している状況も考えられる。

表 5 研究方法

	2006～2021年	2022～2023年	合計
量的研究	8	8	16
質的研究	2	2	4
混合研究	1	0	1
文献分析	1	1	2
合計	12	11	23

出所：筆者作成

3.1.5 依拠する理論

また、表 6 は、分析手法ごとに整理した対象文献の一覧および依拠している理論である。大半の文献がアイデンティティ理論に依拠した文献が対象となっていることが分かる。個々の理論を含む文献の内容分析は次章にて議論する。

表 6 対象文献の一覧および理論

分析手法	文献	理論
量的研究	Libaers & Wang (2012)	Role identity theory, Social network theory
	Zou, Guo, et al. (2019)	Social identity theory
	Zou, Li, et al. (2019)	Social identity theory, Identity theory
	Murad et al. (2022)	Social Identities theory, Nascent entrepreneurial behavior
	Guo et al. (2019)	Social identity theory
	Hahn (2020)	Social identity theory
	Galati et al. (2020)	Social identity theory, Self-determination theory, Role identity theory
	Francois & Belarouci (2021)	Organizational identity theory
	Shi et al. (2021)	Social identity theory
	Waldman et al. (2022)	Organizational justice theory
	Wang et al. (2022)	Identity theory
	Clarysse et al., (2023)	Identity orientation
	Pattnaik et al. (2023)	Social identity theory, Self-discrepancy theory
	Chen et al. (2023)	Identity theory, Knowledge spillover theory
	Zou et al. (2023)	Identity theory, Social identity theory, Entrepreneurial narrative
	Choi et al. (2023)	Role identity theory, Role conflict theory
質的研究	Jain et al. (2009)	Role identity, Sense-making theory
	Gupta & Etzkowitz (2021)	Identity theory, Gender theory
	Mäkinen & Esko (2023)	Identity theory, Hybrid identity
	Giunti & Duberley (2023)	Work identity theory
文献分析	Lamy & Shinn (2006)	Identity orientation
	Nikiforou et al. (2018)	Faultline theory, Upper echelons theory
混合研究	Hayter et al. (2022)	Identity theory

出所：筆者作成

3.2 内容分析

第2節では、本レビューの対象とした文献について、核となる内容に関して分類したうえで、その詳細を示す。詳細な内容を説明するにあたり、表6に示すアカデミック・アントレプレナーが持つ2つのアイデンティティの比較（Zou, Guo, et al., 2019）を前提として示しておく。この違いをベースとして、以降の分析結果の説明を行う。

表6 研究者と起業家のアイデンティティの比較（Jain et al., 2009 と Bartunek & Rynes, 2014 に基づく）

学術的なアイデンティティ志向		起業家的なアイデンティティ志向
論理	普遍性	独自性
価値	共有財産	私有財産
時間軸	長期	短期
関心	論文	製品
インセンティブ	同業者からの評価 / 地位	利益

出所：Zou, Guo, et al. (2019) の表1を筆者が翻訳

3.2.1 アカデミック・アントレプレナーの志向・タイプ

対象文献のレビューから、アカデミック・アントレプレナーには複数の志向やタイプがあることが明らかになった。これらの文献は、社会的アイデンティティ理論⁴⁾やアイデンティティ志向に依拠した分析が行われており、アカデミック・アントレプレナーが何を重要視し、動機付けられるかによって分類していた。

第一に、ベンチャー企業としての成長やビジネスとしての成功、商業化・金銭的な利益を重要視するタイプである。これらのタイプを持つアカデミック・アントレプレナーは、ダーウィン型（Clarysse et al., 2023 ; Murad et al., 2022）やパイオニア（Lamy & Shinn, 2006）と呼ばれ、スタートアップに対する成長願望が高い傾向がある（Clarysse et al., 2023）。さらに学術的な背景を持つ創業者は、学術的な背景を持たない創業者と比較して、このダーウィン型になりにくい特徴がある（Clarysse et al., 2023）。

第二に、限定された人々のための技術的利益を評価し、コミュニティから支援されることを望み、コミュニティ内での人間関係を重要視するタイプで、コミュニタリアン（Clarysse et al., 2023 ; Murad et al., 2022）やアカデミック（Lamy & Shinn, 2006）と呼ばれている。これらの志向やタイプを持つアカデミック・アントレプレナーは、スタートアップに対する成長意欲は低い傾向があり、学術的な背景を持つ創業者は、このコミュニタリアンになりやすい（Clarysse et al., 2023）。

第三に、地域社会や社会活動に貢献するサービスや製品に従事し、社会の福祉を最大化すること

4) 社会的アイデンティティとは、社会的集団（または複数の集団）の一員であるという知識とその一員であることに付随する価値や感情的な意味合いから派生する個人の自己概念の一部であると定義しており、この概念に基づいて集団間行動を説明する理論を社会的アイデンティティ理論という（Tajfel, 1978）。

に価値を置くタイプであり、宣教師型 (Clarysse et al., 2023; Murad et al., 2022) やヤヌス (Lamy & Shinn, 2006) と呼ばれる。このタイプは、学術的な研究と起業家としての活動をバランスよく組み合わせ活動している (Erwan & Lamy, 2006)。このタイプも、コミュニタリアンと同様に、学術的な背景を持つ創業者が、この宣教師タイプになりやすい (Clarysse et al., 2023)。コミュニタリアンとの違いは、宣教師型の場合、創業したスタートアップに対して成長志向を伴う可能性が示唆されている (Clarysse et al., 2023)。

学生を対象とした研究ではあるが、第1～3のタイプのアカデミック・アントレプレナーの志向やタイプが、起業家的行動と正の有意な関係があることも実証されている (Murad et al., 2022)。また、3つの志向やタイプと起業家的行動との関係に影響を与える媒介因子として、起業家的自己効力感が重要であることも示されている (Murad et al., 2022)。

さらに、イタリアで設立された大学発ベンチャーを対象とした調査では、アカデミック・アントレプレナーの動機が時とともに変化するのか、なぜ変化するのかに焦点を当てた調査があり、設立当初と設立後の動機をクラスターし、分類している (Galati et al., 2020)。この Galati et al. (2020) では、設立当初の動機として、自分たちのアカデミックなコミュニティと資金・資源へのアクセスの両方を改善したいという動機 (すなわち、コミュニタリアンやアカデミックの志向を持つ者) から起業を志した研究者は、その動機を長期にわたって維持し、金銭的な動機には変化しにくいことが示唆されている。一方で、多様で複雑な動機⁵⁾が組み合わさったアカデミック・アントレプレナーのクラスターは、霧型 (foggy) と名づけられ、ハイブリッドなアイデンティティを持ち、金銭的な動機を持つ市場志向型のアカデミック・アントレプレナー (すなわち、ダーウィン型やパイオニアの志向を持つ者) に動機が変化する可能性があることが示唆されている (Galati et al., 2020)。

以上のように、アカデミック・アントレプレナーは、タイプごとにその動機が異なることから、アイデンティティを構築するプロセスや要因も異なることが推察される。

3.2.2 アイデンティティとコンフリクトの関係性

アカデミック・アントレプレナーは、研究者としてのアイデンティティと起業家としてのアイデンティティとの間でコンフリクトが生じると指摘されている。このことから、アイデンティティとコンフリクトに関する変数を操作化し、この変数間の関係性を実証する研究が複数存在した。量的研究においては、アイデンティティ、コンフリクトの両変数とも心理的な尺度としてリッカート尺度を用いた質問票にて得られた回答から操作化をしている。特に、アカデミック・アントレプレナー自身の役割葛藤⁶⁾ (Role Conflict, 以下、RC と略す) とアイデンティティが相互に関連しており、こ

5) e.g. 個人所得の増加や社会的課題への研究の適用可能性、技術の普及、産業界の研究や問題に関する情報の獲得、研究者の職務能力を向上させることなどが挙げられている。

6) 役割の要件における一致・不一致、または適合・不適合の次元のこと。一致または適合は、役割の遂行に影響を与える一連の基準または条件に対して相対的に判断される葛藤のことである (Rizzo et al., 1970)。2つ以上の役割要件が

の間の関係性を検証する研究が複数存在した。

RCは研究者の起業家としてのアイデンティティ（Entrepreneurial Identification、以下EIと略す）に悪影響を及ぼす（Shi et al., 2021 ; Zou, Li, et al., 2019 ; Choi et al., 2023）。Zou et al.（2023）はRCを減らすことによって役割の調和を高めることができ、特に他の起業家のナラティブに触れているほど、EIが高まるにつれてアカデミック・アントレプレナーの役割を調和するレベルがより速く高まる可能性があると主張している⁷⁾。起業家となる前に様々なグループに属し、関係性を築いている場合、EIに正の影響を与える（Zou, Li, et al., 2019）という実証結果もあり、起業家との接点で、アカデミック・アントレプレナーに影響を与えていることが示唆されている。

さらには、アカデミック・アントレプレナーが役割志向⁸⁾（Role Orientation：以下、ROと略す）を持つ場合、RCがEIに与える負の効果を緩和する（Zou, Li, et al., 2019）。また、アカデミック・アントレプレナーが外国生まれである場合は、RCがEIに及ぼす悪影響が緩和されることが実証されている（Choi et al., 2023）。

一方で、RCを従属変数とした研究では、学者としてのアイデンティティがRCを高め、起業家としてのアイデンティティはRCを低下させることが実証されている（Zou, Guo, et al., 2019）。一方で、学者としてのアイデンティティと起業家としてのアイデンティティの相互作用は、RCへの悪影響を低下させるという結果であった（Zou, Guo, et al., 2019）。Zou et al.（2023）では、アカデミック・アントレプレナーのEIが高まるにつれて、認知と行動のギャップが減少するため、研究者としての役割と起業家としての役割の調和も進むが、その後、自身の認知と能力のギャップが増加するため役割の調和が減少することを示唆している。さらに、研究者としてのアイデンティティが増加すると、起業家としての役割との調和を損なうことが示唆されている（Zou et al., 2023）。

3.2.3 アイデンティティの構築とそのプロセス

前項から、アカデミック・アントレプレナーが自身のアイデンティティを構築するにあたり、自身のRCが影響していることが多くの実証研究を通じて明らかになっている。アカデミック・アントレプレナーが、これらのRCとどのように向き合い、対峙しているのか、そのプロセスについては、質的な研究にていくつか報告がある。

Jain et al.（2009）は、研究者には学術的なアイデンティティが粘着しており、多くの場合、既存の研究者としてのアイデンティティを放棄するのではなく、学術的なアイデンティティの上に修正を加え、重ねるプロセスがあると主張している。具体的には、学術的な活動に加え、新しく商業的

同時に発生し、一方の役割を果たすことで他方の役割を果たすことが難しくなることから生じる（Fisher, 2001）。

7) 一方で、起業家ナラティブのレベルが高いほどアカデミック・アントレプレナー自身の認知と能力のギャップから役割の調和を悪化させてしまう可能性についても、実証結果から考察されている。

8) 個人が自分の役割をどのように定義しているか、自分の役割に関連すると考えるタスク、目標、問題の種類は何か、そうしたタスク、目標、問題にどのように効果的にアプローチするかという志向のこと（Parker, 2007）。

な活動を行うに際しては、技術移転などの活動を内外のアクターにその役割を委任する (Jain et al., 2009). また、自身が商業化の活動を行うに際しても、商業化に関連する規範の影響から、自らの学問的なアイデンティティを守るための対応を講じながら、アカデミック・アントレプレナーは学問的役割のアイデンティティの維持・育成に専念している (Jain et al., 2009).

Giunti & Duberley (2023) も、アカデミック・アントレプレナーは研究者と起業家のアイデンティティが融合しているのではなく、学術的なアイデンティティが中心的なままであり、両者は分離していると主張している。アカデミック・アントレプレナーは、そのアイデンティティを変化させているのではなく、アカデミックの活動を継続する中で、研究者が新しい役割を取り入れることであるとしており、ワーク・アイデンティティの視点からアカデミック・アントレプレナーがアイデンティティを構築するプロセスを捉えている (Giunti & Duberley, 2023).

さらに Mäkinen & Esko (2023) は、Jain et al. (2009) および Giunti & Duberley (2023) の示したアイデンティティ・ワークも含め、3つのアイデンティティを構築する過程を示している。すなわち、(1) ハイブリッド化、(2) ハイブリッド化の拒否、(3) 移行という3つのアイデンティティ構築プロセスを類型化した。ハイブリッド化のプロセスでは、個人的なレベルでも職業的なレベルでも、学問と起業の要素を区分し、2つの領域の架け橋となる境界を構築している。(2)のハイブリッド化を拒否するプロセスでは、起業家の影響から学術的なアイデンティティと学問の領域を守り、両領域の境界がはっきりと分かれるようにした。このハイブリッド化の拒否のプロセスは、Jain et al. (2009) および Giunti & Duberley (2023) が示した主張と同様である。(3) 起業家への移行のプロセスでは、研究者が2つの領域は両立可能であり、自身のことをますます起業家的であると認識することで、学術的な領域と起業家活動の境界を行き来が可能なものとしてアイデンティティを再構築していた。

3.2.4 何がアカデミック・アントレプレナーのパフォーマンスに影響を与えるのか

複数の文献にて、アカデミック・アントレプレナーの成果指標 (アカデミック・アントレプレナーシップ・パフォーマンス：以下、AEP と略す) とアイデンティティに関する指標との関連性について定量的な分析が実施されていた。AEP は、起業家の複数のアイデンティティの追求を考慮に入れるべきであると指摘されており (Gruber & MacMillan, 2017)、AEP の操作化は、アカデミック・アントレプレナーを対象とした複数設問によるアンケート調査の回答に重みづけをして行われていた。

Zou, Guo, et al. (2019) は、RC は AEP に負の影響を与えることを実証した。研究者が起業家としての活動に取り組む際に、教育、研究、起業の間での時間配分がうまくいかなるとの指摘がある。さらに、ビジネス上の問題に対処するのに研究者の論理を用いることは不適切であり、その逆もまた然りである (Kieser & Leiner, 2009)。

ただし、異なる複数のアイデンティティを持つことは、必ずしも AEP に負の効果を与えるわけではない。個人は複数のアイデンティティを管理する経験を積み、より優れた社会的ネットワークを構築するようになる。その結果、情報、知識、その他の重要な資源に容易にアクセスできるように

なり (Dokko & Rosenkopf, 2010), 異なるアイデンティティのコンフリクトを管理しやすくなる (Shi et al., 2021). よって, ある閾値を超えるまでは, RCが高まるが, 閾値を超えるとRCが低下し, ひいてはAEPが高まる (Shi et al., 2021).

また, 研究者が持つEIがAEPを高める (Guo et al., 2019). 一方で, 商業的な志向のない研究者は, アカデミック・アントレプレナーとしての活動が少ないだけでなく, 政府助成金の件数が少なくなるという結果も報告されている (Libaers & Wang, 2012).

AEPとアイデンティティ・ワークとの関連性については, 他の代理変数でもいくつか実証研究が報告されている. 大学の常勤職を持ちながら起業に取り組むアカデミック・アントレプレナーの場合, 異なる二つのアイデンティティを持つことが知識の専門性を深める (Chen et al., 2023). 一方で, 起業に全面的に関与し, 大学の非常勤講師を務めるアカデミック・アントレプレナーの場合は, 異なる2つのアイデンティティを持つことが探求する知識の範囲を大きくする (Chen et al., 2023). 研究者の持つ熱意を操作化した研究では, 研究者が自身の目指すべき将来の行動指針を持つこと (自己ガイド) はアカデミック・アントレプレナーの熱意に影響を与えるが, 他者からの期待に基づき自分がどのような人間であるべきかを示した指針 (他者ガイド) はアカデミック・アントレプレナーの熱意には影響しない. (Pattnaik et al., 2023). さらに, 研究者のグループとしてのアイデンティティが高まるとアカデミック・アントレプレナーとしての熱意に対する自己ガイドの正の効果が高まる一方, 起業家のグループとしてのアイデンティティが高まるとそのプラスの効果が弱まることが実証されている (Pattnaik et al., 2023).

4 結論

4.1 インプリケーションと今後の研究の方向性

第3章では, アカデミック・アントレプレナーのアイデンティティ・ワークについて, 記述的特徴, 内容の整理を行ってきた. ここまでの内容を踏まえ, 今後の研究の方向性をいくつか提示する.

第一に, 大学組織や戦略との関連性を考慮した研究アプローチである. 本稿が対象としてきた文献では, アカデミック・アントレプレナーの内面に焦点を当てたミクロレベルでの研究が対象であった. 国籍や社会環境などのマクロレベルの視点は, 考察の中で一部考慮された研究は存在するが, 大学の組織構造や特徴, 大学ごとの技術移転や大学発ベンチャーへの関与・支援に関する戦略を考慮したメゾレベルの議論が見落とされている. アカデミック・アントレプレナーのミクロレベルの議論とマクロ・メゾレベルの議論を接続することで, アイデンティティ・ワークの理論がよりクリアになるであろう.

第二に, アカデミック・アントレプレナーのタイプごとに, アイデンティティ・ワークがどのように異なるのかを検証するアプローチである. 本稿が対象としてきた文献では, アカデミック・アントレプレナーのタイプを分類したうえで, タイプごとにAEPに対してどのような影響を与えるの

かを実証する研究がなされていた (Clarysse et al., 2023 ; Murad et al., 2022). Lamy & Shinn (2006) のようにフランスにおけるアカデミック・アントレプレナーに対するアンケート調査とテレフォン・インタビュー調査を組み合わせた混合研究により、タイプごとのアイデンティティ・ワークに接近した研究は存在するが、こうしたアイデンティティ・ワークのプロセスに接近した質的研究の蓄積が少ないのが現状である。こうしたアカデミック・アントレプレナーのタイプごとの先行研究に依拠した質的研究の蓄積により、アカデミック・アントレプレナーが自らのアイデンティティをどのように構築するべきであるかを検討する際の参考となるであろう。

第三に、日本固有の文脈におけるレプリケーション研究である。起業活動の実態を調査したグローバル・アントレプレナーシップ・モニター (GEM) では、国際的にみた日本の起業活動は低水準であると位置づけられてきた。一方で令和 5 年度産業技術調査 (大学発ベンチャー実態等調査) 報告書 (経済産業省, 2024) によると、大学発ベンチャーの企業数及び増加数はともに過去最高を記録しているという現状もある。日本の大学発ベンチャーのデータを取得し、先行研究に依拠した研究方法を用いたレプリケーション研究は、日本の大学発ベンチャーをミクロ視点で把握するうえで重要な示唆が得られる可能性が高い。

5 おわりに

本研究では、アカデミック・アントレプレナーのアイデンティティ・ワークをテーマとしたシステマティック・レビューを行い、不足している議論や今後の研究の方向性を提示した。本研究では研究対象をアカデミック・アントレプレナーに限定し、さらにそのアイデンティティ・ワークという行為に絞ったミクロ視点でのレビューであるため、絞られた文献数による議論となっている。すなわち、今回のレビューでは、検索語として、アカデミック・アントレプレナーおよびアイデンティティの両方を研究対象としている 23 件の文献レビューを実施したため、アカデミック・アントレプレナーに限定しないアイデンティティ・ワークの議論や、アカデミック・アントレプレナーを取りまくアイデンティティ・ワーク以外の理論的枠組みについては考慮していないため、今後の研究課題となるであろう。

【謝辞】

本研究は、流通科学大学 研究助成型教育研究費 特別研究費および、JST-Ristex (課題番号：JPMJRX21B2) の助成を受けたものである。

【参考文献】

Abreu, M., & Grinevich, V. (2013). The nature of academic entrepreneurship in the UK: Widening the focus on

- entrepreneurial activities. *Research Policy*, 42 (2), 408–422.
- Bartunek, J. M., & Rynes, S. L. (2014). Academics and Practitioners Are Alike and Unlike: The Paradoxes of Academic–Practitioner Relationships. *Journal of Management*, 40 (5), 1181–1201.
- Bercovitz, J., & Feldman, M. (2008). Academic Entrepreneurs: Organizational Change at the Individual Level. *Organization Science*, 19 (1), 69–89.
- Chen, Y., Liu, W., Sindakis, S., & Aggarwal, S. (2023). Transferring scientific knowledge to academic startups: The moderating effect of the dual identity of academic entrepreneurs on forming knowledge depth and knowledge breadth. *Journal of the Knowledge Economy*, 15, 1823–1844.
- Choi, H., Siegel, D. S., Waldman, D. A., Frandell, A., & Kim, J. (2023). Role conflict, entrepreneurial identity, and academic entrepreneurship: the effects of immigration status. *Small Business Economics*, 63, 611–626.
- Clarysse, B., Andries, P., Boone, S., & Roelandt, J. (2023). Institutional logics and founders' identity orientation: Why academic entrepreneurs aspire lower venture growth. *Research Policy*, 52 (3), 104713.
- Dokko, G., & Rosenkopf, L. (2010). Social Capital for Hire? Mobility of Technical Professionals and Firm Influence in Wireless Standards Committees. *Organization Science*, 21 (3), 677–695.
- Fisher, R. T. (2001). Role stress, the type A behavior pattern, and external auditor job satisfaction and performance. *Behavioral Research in Accounting*, 13, 143–170.
- Francois, V., & Belarouci, M. (2021). Do academic spin-offs outperform young innovative companies? A comparison of survival rates and growth. *Journal of Small Business and Enterprise Development*, 29 (1), 1–17.
- Galati, F., Bigliardi, B., Passaro, R., & Quinto, I. (2020). Why do academics become entrepreneurs? How do their motivations evolve? Results from an empirical study. *International Journal of Entrepreneurial Behavior & Research*, 26 (7), 1477–1503.
- Giunti, G., & Duberley, J. (2023). Academic entrepreneurship: work identity in contexts. *Entrepreneurship and Regional Development*, 35 (5–6), 532–552.
- Gruber, M., & MacMillan, I. C. (2017). Entrepreneurial behavior: A reconceptualization and extension based on identity theory. *Strategic Entrepreneurship Journal*, 11 (3), 271–286.
- Guo, F., Zou, B., Guo, J., Shi, Y., Bo, Q., & Shi, L. (2019). What determines academic entrepreneurship success? A social identity perspective. *International Entrepreneurship and Management Journal*, 15 (3), 929–952.
- Gupta, N., & Etzkowitz, H. (2021). Women founders in a high-tech incubator: negotiating entrepreneurial identity in the Indian socio-cultural context. *International Journal of Gender and Entrepreneurship*, 13 (4), 353–372.
- Hahn, D. (2020). The psychological well-being of student entrepreneurs: a social identity perspective. *International Entrepreneurship and Management Journal*, 16 (2), 467–499.
- Hayter, C. S., Fischer, B., & Rasmussen, E. (2022). Becoming an academic entrepreneur: how scientists develop an entrepreneurial identity. *Small Business Economics*, 59 (4), 1469–1487.
- Jain, S., George, G., & Maltarich, M. (2009). Academics or entrepreneurs? Investigating role identity modification of

- university scientists involved in commercialization activity. *Research Policy*, 38 (6), 922–935.
- Kieser, A., & Leiner, L. (2009). Why the rigour–relevance gap in management research is unbridgeable. *The Journal of Management Studies*, 46 (3), 516–533.
- Lamy, E., & Shinn, T. (2006). The autonomy of science threatened by "commodification." Forms of research entrepreneurship in France. *Actes de La Recherche En Sciences Sociales*, 164 (4), 23–50.
- Libaers, D., & Wang, T. (2012). Foreign-born academic scientists: entrepreneurial academics or academic entrepreneurs? *R and D Management*, 42 (3), 254–272.
- Mäkinen, E. I., & Esko, T. (2023). Nascent academic entrepreneurs and identity work at the boundaries of professional domains. *The International Journal of Entrepreneurship and Innovation*, 24 (3), 167–177.
- Murad, M., Ashraf, S. F., Syed, N., Munir, M., & Butt, R.S. (2022). Entrepreneurial social identities and nascent entrepreneurial behaviour: Mediating role of entrepreneurial self-efficacy. *Entrepreneurial Business and Economics Review*, 10 (1), 129–144.
- Nikiforou, A. (iro), Zabara, T., Clarysse, B., & Gruber, M. (2018). The Role of Teams in Academic Spin-Offs. *Academy of Management Perspectives*, 32 (1), 78–103.
- Parker, S. K. (2007). 'That is my job': How employees' role orientation affects their job performance. *Human Relations; Studies towards the Integration of the Social Sciences*, 60 (3), 403–434.
- Pattnaik, S., Mmbaga, N., White, T. D., & Reger, R. K. (2023). To entrepreneur or not to entrepreneur? How identity discrepancies influence enthusiasm for academic entrepreneurship. *The Journal of Technology Transfer*.
- Rizzo, J. R., House, R. J., & Lirtzman, S. I. (1970). Role Conflict and Ambiguity in Complex Organizations. *Administrative Science Quarterly*, 15 (2), 150–163.
- Rothaermel, F. T., Agung, S. D., & Jiang, L. (2007). University entrepreneurship: a taxonomy of the literature. *Industrial and Corporate Change*, 16 (4), 691–791.
- Shane, S. A. (2004). *Academic Entrepreneurship: University Spinoffs and Wealth Creation*. Edward Elgar Publishing. (金井一頼・渡辺孝監訳『大学発ベンチャー 新事業創出と発展のプロセス』中央経済社 2005).
- Shi, Y., Zou, B., & Santos, R. S. (2021). Dr. Jekyll and Mr. Hyde: How do academic entrepreneurs deal with identity conflict? *Review of Managerial Science*, 15 (8), 2165–2191.
- Tajfel, H. (Ed.). (1978). *Differentiation between social groups: Studies in the social psychology of intergroup relations*. 474.
- Tranfield, D., Denyer, D., & Smart, P. (2003). Towards a methodology for developing evidence-informed management knowledge by means of systematic review. *British Journal of Management*, 14 (3), 207–222.
- Waldman, D. A., Vaulont, M. J., Balven, R. M., Siegel, D. S., & Rupp, D. E. (2022). The role of justice perceptions in formal and informal university technology transfer. *The Journal of Applied Psychology*, 107 (8), 1397–1413.
- Wang, M., Soetanto, D., Cai, J., & Munir, H. (2022). Scientist or Entrepreneur? Identity centrality, university entrepreneurial mission, and academic entrepreneurial intention. *The Journal of Technology Transfer*, 47 (1), 119–146.
- Zou, B., Guo, J., Guo, F., Shi, Y., & Li, Y. (2019). Who am I? The influence of social identification on academic entrepreneurs'

- role conflict. *International Entrepreneurship and Management Journal*, 15 (2), 363–384.
- Zou, B., Guo, J., Sun, S. L., & Guo, F. (2023). Achieving harmony: Social identification in academic entrepreneurs' role transition. *Technovation*, 128, 102859.
- Zou, B., Li, Y., Guo, J., & Guo, F. (2019). Antecedents and outcome of entrepreneurial identification: The moderating effect of role orientation. *Science & Public Policy*, 46 (4), 541–551.
- 新谷由紀子 (2016).「大学における利益相反マネジメントの実質化のために ー運用の手引ー」<https://coi-sec.tsukuba.ac.jp/wp-content/uploads/2019/06/201606.pdf> (2024 年 7 月 30 日閲覧)
- 経済産業省 (2024).「令和 5 年度産業技術調査 (大学発ベンチャー実態等調査) 報告書」https://www.meti.go.jp/policy/innovation_corp/start-ups/start-ups.html (2024 年 7 月 30 日閲覧)
- 原健二・薄井竜一・高柳亮 (2024).「今更聞けない産学連携・技術移転の始め方, 育て方」『応用物理』93 (5), 300-304.
- 森口文博・北垣和彦・杉浦淳 (2020).「大学発ベンチャーを活用した産学連携と研究活動—中規模私立大学の事例考察—」『経営システム』30 (1), 31-42.
- 一般社団法人 日本経済団体連合会 (2023)「わが国スタートアップエコシステムの過去・現在と未来への展望〈2〉」『Action (活動) 週刊 経団連タイムス』 2023 年 7 月 13 日 No.3598 (2023 年 7 月 13 日 No.3598) https://www.keidanren.or.jp/journal/times/2023/0713_10.html?v=p (2024 年 7 月 30 日閲覧)

Systematic Literature Review on Academic Entrepreneur's Identity Work

Fumihiko MORIGUCHI

ABSTRACT

This paper proposes a systematic literature review of existing research on identity work performed by academic entrepreneurs. The results of the analysis of 23 selected peer-reviewed articles are summarized, and remaining issues and future research approaches are proposed.

Keywords: academic entrepreneur, identity work, systematic literature review

